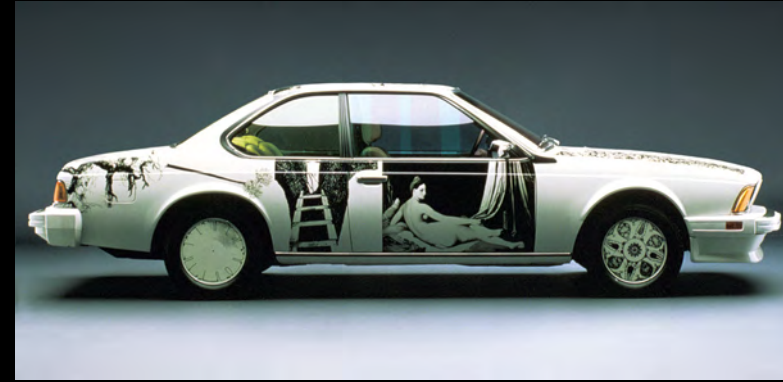




フランス人レーサーのエルヴェ・ブーランが考案したBMWアートカー。プロジェクトでは、これまで18人のアーティストがデザインを手がけてきた。(上から下、左から右へ)アレクサンダー・カルダー

(1975年)、エスター・マラング(1991年)、ジェフ・クーンズ(2010年)、フランク・ステラ(1976年)、デイヴィッド・ホックニー(1995年)、ケン・ダン(1989年)、ロイ・リキテンシュタイン(1977年)、サンドロ・キア(1992年)、

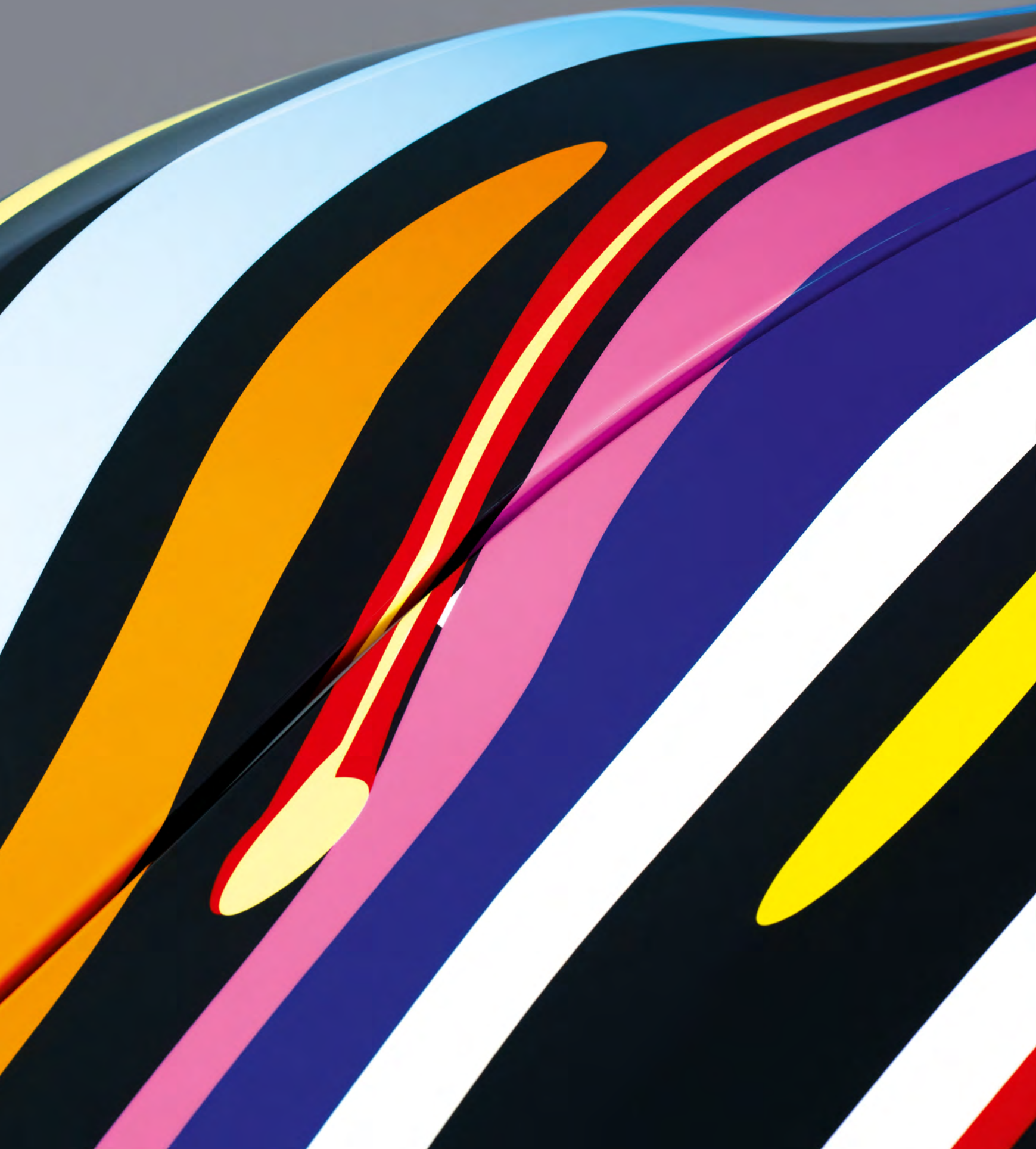
エルンスト・フックス(1982年)、加山又造(1990年)、マイケル・ネルソン・ジャカマラ(1989年)、A・R・ペンク(1991年)、セザール・マンリケ(1990年)、アンティ・ウォーホル(1979年)、ロバート・ラウシェンバーク(1986年)。



文 サイモン・グラント

# 疾走するモダンアート

世界中で活躍しているアーティストに、自動車のボディペイントを依頼したらどうなるか。BMWアートカーのプロジェクトに見られる多様性は、驚きに値する。



数年前のこと、エド・ルシエはロンドンでビジュアル資料を使った伝説的なレクチャーを行った。この時の彼のテーマは「私に影響を与えたお気に入りの作品」というシンプルなものだった。アート界の大御所を恭しく誉めちぎっていたが、いつの間にか、50年代アメリカ車のギアシフトを絶賛する話が淡々と始まった。背後のスクリーンには、ギアシフトの美しい写真が映し出されている。フォードの丸型もあれば、シボレーのチューブ型もある。

幼少期に車でルート66を何度も通ったことがある、ルシエのようなアメリカのモダンアーティストにとって、車は文化風景には不可欠の構成要素だ。フォードの車に強い共感を感じていた彼の初期のプロジェクトには、「34の駐車場」や「26のガソリンスタンド」というタイトルルの写真集がある。車にもっと深い意味を見出していたアーティストもい



る。彫刻家のエドワード・キーンホルツ（1927〜1994年）は、愛車であるブラウンの1940年型バックカードを溺愛するあまり、墓場までこれを離さなかった。彼の遺体は運転席に固定され、1931年のキャンティ・ウインのポトルやトランプカードが側に置かれ、後部座席には愛犬スマッシュの遺灰も同乗した。生前のキーンホルツは、華やかで辛口の政治的インスタレーションが売り物であっただけに、これは間違いなく彼の最高傑作と呼べるだろう。

ほかにもサルバドール・ダリからリチャード・ハミルトン、ジェレミー・デラリーに至るまで、世界中の多くのアーティストが何らかの形で車を取り上げているが、車に惚れ込んだ最初のアーティストといえば、フィリップ・トーマゾ・マリネッティであろう。1909年、この若きイタリアの詩人は、2台の自転車を選びようとして、運転する車を側溝に脱



輪させてしまった。彼は、この経験から啓示を受け、未来派宣言で次のように述べている。「この世の輝きを豊かにしてきたものは、新たな美、すなわち、スピードの美学だ。うなりを上げて走る車は、サモトラケのニケよりもずっと美しいのだ」。威勢のいい未来派にとって、車は新しい自由のシンボルであり、作品のなかでもこれを取り上げようとしていた。

多くの芸術分野で、車のパワーは人間的な表現のシンボルと見なされていた。アメリカの作家、ウィリアム・フォークナーは「自動車は国家的なセックス・シンボルとなった」と謳い、フランスの哲学者ロラン・バルトは1957年に、車、とりわけシトロエンこそ「ゴシック大聖堂に匹敵するものである」と述べている。このような美意識は、ロシア生まれの構成主義者ナウム・ガボにもあったに

違いない。彼は1940年代に、英自動車メーカーのジョエット向けに、そら豆型のハンドルや、透明アクリル樹脂、ナイロンの座席シートなどを採用したスマートでモダンなデザインを提示したが、残念なことに、生産には至らなかった。

ガボのような人物が参加していたら、大いに活躍したであろうと思われるのが、1975年から始まった「BMWアートカー」プロジェクトだ。これはフランスのレーシングカー・ドラ



(左上) アレクサンダー・カルダー (左) のアトリエでエルヴェ・ブーランと。  
(左下) カルダーが仕上げた、プロジェクトの第1号 (1975年)。  
(右) デザインに取り組むロイ・リキエンシュタイン (1977年)。  
[左ページ] ジェフ・クーンズの作品 (2010年)。アートカーのシリーズでは17番目で最新のもの (17番目の「プロジェクト」は、2009年のロビン・ロードの作品だったが、車のペイントではなかったため、アートカーには数えられていない)。



2年目に依頼された彫刻家のフランク・ステラは、面白いビビッドなデイグロ蛍光顔料の作品で知られていたが、意外にも、モノクロでグラフィ用紙のようなグリッドを下地とした、シャープな作品を完成させた。一見地味に見えるものの、新聞のモノクロ写真では精彩を放つ、印刷映えのするデザインだった。続いてアメリカのモダンアーティスト、ロイ・リキテンシュタインが、BMW 320i（モータースポーツの「グループ5」仕様）に陽気なスピードラインを描いた。この車のデザインは人気だったが、1977年のル・マンでは9位止まりと、レースの方では振るわなかった。一方、アンディ・ウォーホルは安っぽいブラシで、（部分的にランボルギーニが製造していた）豪華なBMW M1に生き生きとした抽象画を塗りつけた。ウォーホルの車は、このプロジェクトのなかでは、アシスタントの手を借りずに、すべて本人がペイントした最初の車という点で話題をさらった。このポップアート界の大御所は、仕上がりにご満悦だったようで、「スピードを生き生きと描写するように努めた。本当に速い車は、輪郭も色合いも、すべてばやけて見えるはずだ」と説明している。

ト、マイケル・ネルソン・ジャカマラ（1949年頃〜）はBMW M3のデザインのために招かれた。当時、ジャカマラの作品群「ドリーミング」は国際的な評価を受け、その作品はオーストラリアの公共スペースでも注目されていた。彼の絵画は、風景と心象を結びつけるものだ。車のデザインでもルーフトップの螺旋モチーフ（カンガルーの尾に見立てたもの）を皮切りに、外側にラインとドットを広げ、三次元の「ドリーミング」な風景を車輪の上に完成させた。同じように成功を収めたのは、女性初のアーティストとして起用され、1991年にBMW 525iのデザインを担当した南アフリカのアーティスト・マラング（1935年〜）だった。南デベレ族の一員であるマラングは、トランスバールの農場で育った。ンデベレ族は鮮やかな原色と幾何学模様で家をペイントすることで知られ、マラングは母親と祖母からこの伝統的なウォールペインティングを学んだ。彼女はこの手法を用いて、縦、横、斜めに走る太い黒の線やイエロー、ピンク、グリーン、ブルーの面を縁取り、インパクトの強い大胆なパターンを車のボディに描き出した。以降、日本の風景からヒントを得てエアブラシを絶妙に用いていた加山又造、パンチの効いたアイロニーを「私の願望から私を守って」や「達成不能なもの、いつでも

(左上の3点、上から) ペイント中のアンディ・ウォーホル (1979年)。この車は同年のル・マンで2位に。オーストラリアのマイケル・ネルソン・ジャカマラは、先住民の手法とモチーフを用いた。(右下の2点、左から) テイヴィッド・ホックニー (1995年) は、ドライバーや座席に座る犬などの車内風景をスタイリッシュに外部に描き出した。エスター・マラング (1991年) はンデベレの伝統アートを生かし、初の女性アーティストとしてBMWプロジェクトに参加した。



ジャカマラは、彼の定番である「ドリーミング」な風景を、三次元で車輪の上に完成させた。

LACK OF CHARISMA CAN BE FATAL



(右上) ケン・ダンは1989年に、出身であるオーストラリアの野生からオウムとインディを選び、抽象画としてボディを飾った。「どちらも美しく、もの凄いスピードで移動するもの」であるという。

(右中) 1982年のエルンスト・フックスのモデルは、純粋なアートとしてデザインされ、レースに使用されることはなかった。

(右左) オラファー・エリアソンは2007年に、解体したコンセプトカーにスチール製のメッシュをかぶせて凍結させた。自動車産業が直面する環境問題に一石を投じることを狙っていた。

[左ページ] 電光掲示板や車両ステッカーなど公共アートを手がけるジェニー・ホルツァーにとって、レースカーは理想的なメディアであるという。1999年のBMWには「私の願望から私を守って」を含む6つの短いスローガンがペイントされた。

魅力的」といったフレーズで表現したジェニー・ホルツァーなどが後を引き継いだ。

だが、なかでも印象的な作品といえば、動かない車であろう。独創性溢れるデンマークのオラファー・エリアソンは、液体水素で走る未来型のレースカー、BMW H2 Rを氷の彫刻に変身させてしまったのだ。この作品は、サンフランシスコ近代美術館の建築設計ギャラリーが所有する特殊冷却装置を使って製作された。車からボディをはずし、スチール製のメッシュとパネルでできた半透明の外装を取りつける。これに約2000リットルの水をスプレーしながら、ゆっくりと凍らせたのだ。

プロジェクト・キュレーターのヘンリー・ウアバツハによれば、「この作品を見ることは、今まで見たこともない魔法のような何かに出会うことである。同時にこれを見る人は、シリウスかつ辛辣なメッセージに深く考えさせられる」と語る。示唆に富んだ彼の作品は、マリネットやガボが愛してやまないスピード、空気力学、有機的な美といった要素を内包している一方で、車との共存の方法を問いかける。エリアソンのプロジェクトは、車を使って創造するアートに、スリリングな新しい方向性を示しているのだ。

「パテックフィリップ マガジン・エクストラ」(patek.com/owners) にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧ください。

PHOTOGRAPHS: BMW GROUP CHRISTIAN KAIN ©THE ARTISTS AND THEIR ESTATES DACS, LONDON, ARS AND VAGA, NEW YORK, 2013

